

## 「敵を愛しなさい」

2023年03月03日

「しかし、聞いているあなたがたに言うておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい。呪う者を祝福し、侮辱する者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。求める者には、誰でも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り戻そうとしてはならない。人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。」（ルカ6：27～31）

主イエスを信じて立つキリスト教は「敵を愛しなさい」という教えで理解されているのではない。確かに、主イエスは「敵を愛しなさい」と言われ、その言葉通りを全うされた。しかし、この教えを我々人間に要求されたら、「はい、そうします」と答える人は一人もいない。不可能な教えであると言わざるを得ない。

ルカ福音書6章27節～36節では「敵を愛しなさい」という言葉を巡って書かれ、およそできそうにないことが要求されている。敵を愛し、憎む者に親切にし、呪う者を祝福し、侮辱する者のために祈れ。更に、頬を打つ者には、ほかの頬をも向け、上着を奪い取る者には下着も拒むな。求める者には与え、持ち物を奪う者から取り戻すな。「敵対する者を愛し、祝福を祈れ」までの言葉は理解できたとしても、暴力を受け、奪われても取り返すなどと言われると、とても納得できない。これらの言葉の締めくくりが、「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」である。自分が望むことを敵対する人にする。

主イエスは、そうする理由を述べている。自分を愛してくれる人を愛したところで、どんな恵みがあるか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。自分によくしてくれる人によくしても、どんな恵みがあるか。罪人でも同じことをしている。返してもらおうことを当てにして貸しても、どんな恵みがあるか。罪人でも、同じだけのものを返してもらおうとして、貸している。愛する人への親切は当然で、そこには恵みはない。神を信じ従うあなたがたは敵を愛し、よくしてあげ、当てにしないで貸しなさい。そうすれば、沢山の報いがあり、いと高き方（神）の子となれる。神は恩を知らない者にも悪人にも、情け深い。あなたがたの父なる神が慈しみ深いように、慈しみ深い者になりなさい。著者ルカは、主イエスが「敵を愛しなさい」を巡って語られた言葉を上記のように伝えている。この言葉に従った先達たちの信仰がキリスト教を命あらしめたことは事実である。

愛に関して、Iヨハネ4章10節では、「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めの献げ物として御子（主イエス）をお遣わしになりました。ここに愛があります」と記し、罪のための宥めの献げ物となった主イエスの十字架について、パウロは、「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対する愛を示されました（ローマ5：8）」と書いている。主イエスは、神に敵対する罪人のために、ご自身を十字架に献げる愛を示してくださった。罪人を愛された主イエスの十字架が福音である。

「敵を愛しなさい」という教えの前で、誰も返答できないが、返答する資格も、必要もないだろう。主イエスは神に逆らう罪人のために、十字架にかかって死に、赦しと命を与えてくださった。私のために死んでくださった主イエスの福音を信じ、受け入れる者に、あるいは「敵を愛する」愛が神の側から示されてくるのではないか。「神にできないことは何一つない（ルカ1：37）」の御言葉を信頼することである。